○イネカメムシ

【生態と特徴】

本県での生態は明らかになっていないが、成虫の発生世代は茨城県では年１世代、滋賀県では年２世代とされている。雑木林の中にある枯死したイネ科雑草の株元で成虫越冬していた事例が報告されており、越冬世代成虫は早生品種の出穂に伴い越冬地から水田に直接侵入する場合が多い。侵入後は水田内で産卵し、約１か月後に第１世代成虫が出現する。第１世代成虫は中生～晩生品種の水田に移動し、産卵を行うか、もしくはイネの収穫前に越冬地へ移動する。

成虫は体長 12㎜ 程度で、全体が淡黄褐色で、背部外縁部が黄白色である。また、触角の第１、第２節が赤褐色を帯びる。

1950 年代以降、被害を減らしていたが、近年になって関東以西で本種による斑点米・不稔被害が問題となっており、最重要種の１つとされている。本県においては 2023（令和５）年８月にいわき市でのすくい取り調査で捕獲され、病害虫防除所の調査では 42 年ぶりに発生が確認された。

玄米の基部を特異的に加害し、乳熟期に加害された場合は不稔となり、それ以降は斑点米となる（写真２）。

【防除対策】

他の斑点米カメムシ類と違い、餌としてのイネに対する依存度が非常に高い。出穂直後から水田に侵入するため、防除は穂揃期の散布を基本とし、適宜追加散布を行う。

写真１　イネカメムシ成虫

写真２　特異的に多い基部の被害症状